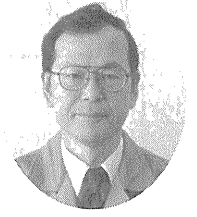


## ずいそう

# 我が家の介助犬

矢野 眞



我が家の犬はこの1月で11歳になった。黒のラブラドル・リトリバーである。所謂ブラックラブ。この種類は最近映画でも主役を張っている盲導犬等の介助犬としてよく知られている。父親が何かのチャンピオン犬で、我が家の犬も血統を登録されている。仔犬は我が家がアメリカに住んでいる時に生後3ヶ月で家族になった。身体に比べて脚ばかりがいやに長く大きかった。

春の暖かい日の午後、私の勤め先に母犬と一緒にやって来た。母親と付いては離れて駆け回り、しばし別離の名残を惜しんだ後（人間の思うことで犬は知る由も無い）車に乗せて走り始めると、後部座席へ這い上がり後ろの窓へ伸び上げて吠え始めた。実に辛い声であった。心を鬼にして走ることで10分程で鳴き止んだ。バックミラーで確認するとまだ立ち上がったまま後ろをじっと見ていた。諦念か、放心か…更に10分ほどするとがさごと前部座席に這い上がり助手席に座り込み私を見ている。春とはいえ夏を思わせる日差しの中、気持ちのいい風を窓から取り込み、高速道路を走ること更にどの位だろう、ふっと右腕に温かみを感じた。仔犬は私の腕に頭を乗せていた。私と仔犬との関係はこの時に始まった。後日、その時の母犬の様子を聞いてみた。仔犬がこんなだったので母犬はさぞかしと思ったが、格段騒ぎはしなかったらしい。この事は本人には伝えていない。

その日から我が家は賑やかになった。長男がリキ(Rickie)と名付けた。ガレージで飼う事にした。トイレの躰は専ら家内がした。それ以外の一般的な躰は私も子供たちも夫々がした。早く立派な犬にしようとして一所懸命だった。ある日、下の子に言われた。

「お父さん、そんなにおこっちゃかわいそうだよ。いい犬にならないよ」

どきっとした。私は子供にも厳しかった。愛情の発露とは難しいものである。

リキは寂しがりやである。夜になるとガレージから悲しげな声が聞こえてきた。結局家の中で飼う事になった。昼間は常に誰かしらの後を付いて回っていた。夜になると夫婦のベッドに上がってきた（実は最初私が乗せたのだ）。リキはここが気に入った。川の字である。必ず二人の真ん中に横になる。可愛いものだ、と言っている仔犬の時はよい。そのうち40キロを超えた。太っているのではない。普通のラブより一回り大きいのだ。家内は別の部屋へ移動した。断ってお

くが、リキは雄である。

アメリカへ来た時、子供たちは12歳と9歳であった。地域の公立学校へ転入させた。さっぱり判らない異次元の世界へ迷い込んだ様なものだったろう。リキが我が家の一員になったのはそれから大分後の事であり二人は既にアメリカに適応していた。其れでも尚、微妙な年齢の二人にとってリキは癒しの兄弟であり、精神的な支えともなっていた事を後日家内から聞かされた。男の兄弟は時に激しく取っ組み合いの喧嘩をする。するとリキはどこからでもすっ飛んで来て喧嘩を止める。正に止めるのである。リキは立ち上がるとでかい。組み合っている二人の腕に前脚を掛けて間に割って入るのである。そうしてウー、ワン（もう止める）と一言。これで喧嘩は終わる。親のように、何が原因か、どっちが悪いなどと野暮なことは聞かないのである。恥ずかしながら、夫婦喧嘩も偶には起きる。子供と違って取っ組み合いにはならないが、声を荒げて言い合いになる。リキは必ず、より興奮している方へやって来て傍にピタリと座り、人の手や顔をぺろぺろと優しく舐める「そう向きにならないで、ほらほら、もうその辺で」。人は何かを始めたり、止めるにはきっかけを必要とする事が有るものである。尤も最近ではリキも歳をとったせいか、夫婦喧嘩が始まると、こちらを一瞥の後、のっそのっそと他の部屋へ行ってしまう。多分、「うるさいな。いい加減にしなさいよ。いい歳こいて」。と思っているのであろう。リキのこうした行動は家の中だけだと思っていたが、外で他の犬同士がいがみ合っていると間に割って入り、喧嘩を止めるそうである。リキは争いを好まない平和志向の仲裁犬だと近隣で言われているらしい。一般的に世で言う介助は何もしないが、リキは我が家の全員にとって掛替えの無い介助犬である。

今や我が家も息子たちは独立して家を出ている。偶に顔を出すのは無性にリキに会いたくなった時らしい。11歳ともなると白いものが増えてきた。ブラック・ラブではあるが、ホワイト・ラブに変身するまで元気な。

家内に言われた。「あなたは子供を育てる前に犬を飼ってみるべきだったわね」。今更言われても遅いが、しかしな、我が家の息子二人は立派に育ったと私は自負しているのだが…。なあ、リキ、お前のお陰でな。

—やの まこと 株式会社日本除雪機製作所代表取締役社長—